

原著

「認知症高齢者を対象としたパーソンセンタードケアにおける
尊厳の保持とコミュニケーションの理念に関する研究」

山戸 隆也*

A Study on the Idea Concerning Maintenance of Dignity and Communications
in Person Centered Care with Dementia Older People

Takaya Yamato

この研究の目的は、認知症高齢者を対象としたパーソンセンタードケアにおける尊厳の保持とコミュニケーションの理念について検討することにある。

認知症高齢者の声に耳を傾けること、言葉と行動にきめ細やかに心を傾けながら、寄りそうことによって、その当事者の視点を理解することに近づくことが出来る。人の価値を認めることや、尊重、信頼はパーソンセンタードケアの真髄である。

さらに、当事者の価値を認める介護提供者の育成のためには、組織管理者、家族といったケア提供者を取り巻く人々が、ケア提供者の価値を認め、パーソンセンタードケアを実践できるしくみを作り上げていくことが肝要である。

Key words: パーソンセンタードケア、認知症高齢者、人間の尊厳、コミュニケーション

I はじめに

利用者本位の認知症ケアの質の向上が模索されている我が国の現状において、近年、トム・キットウッドによる考察をはじめとするパーソンセンタードケアが導入されつつある。

この研究の目的は、認知症高齢者を対象としたパーソンセンタードケアにおける、尊厳の保持とコミュニケーションの理念について検討することにある。

本稿ではまず、パーソンセンタードケアの基本的な内容を示し、日本におけるパーソンセンタードケア研究の動向について、特にコミュニケーション研究に関する知見に焦点を当てて検討する。

さらに、トム・キットウッド、ブルッカー、マッカーシー等による考察をもとに、認知症高齢者とのコミュニケーションについての留意点について検討を行う。

II パーソンセンタードケアの基本的要素

水野裕氏によると、パーソンセンタードケア（その人を中心とした介護）は、トム・キットウッドが提唱したものである¹⁾

トム・キットウッドによると、パーソンセンタードケアは、関係や社会的存在の文脈の中で、介護者が認知症の人を固定観念で捉え、病人扱いする習慣を捨て、率直で偏見のない態度で、それぞれの独自性を認めて人として出会うという方法を通じて可能となってくるのである²⁾。

また、トム・キットウッドは「認知症の弁証法：アルツハイマー病への特別な言及」という論文において、個々人のその人らしさ（personhood）を強調するものの見方を提示し、「医学モデル」についての、よりシンプルなバージョンに基づくものよりも、認知症についてのさらに包括的でより決定的でない考察を提供しており、「ケアについてより人格的で、より楽観的な視点のための道を開くものである³⁾」としている。

ブルッカーによると、パーソンセンタードケア

* 四條畷学園短期大学 介護福祉学科

についての定義は、これまで、それほど明確ではなかった。⁴⁾ 彼は近年のパーソンセンタードケアについての定義を、2004年の著作の中で4つの要素にまとめている。⁵⁾

- (1) 年齢や認知能力にかかわらず、全ての人々の存在自体に絶対的な価値があると認めること
- (2) 個人の独自性を尊重してアプローチすること
- (3) 認知症をもつ人の視点から世界を理解すること
- (4) 心理的ニーズを満たし、相互に支え合う社会的環境を提供すること

また、ブルッカーはこれらの4つの要素を等式の形で、図1のように表している。⁶⁾ この等式では、それらの要素が、他の要素より優先されてしまうということはない。

図1：パーソンセンタードケアに関する等式

PCC (パーソンセンタードケア) =V (人々の価値を認める) +I (個人の独自性を尊重する) +P (その人の視点に立つ) +S (相互に支え合う社会的環境を提供する)

出典：D. Brooker, *Person-centred Dementia Care*, Jessica Kingsley Publisher 2007 (村田康子他訳) 『VIPS ですすめるパーソン・センタード・ケア』クリエイツかもがわ 2010年 P.19 より引用。

いずれにしても、人々の価値を認めることはパーソンセンタードケアの真髄である。この本質的な要素が、施設の価値基準、職員の研修方針、スタッフの採用基準、ケアに関わる基準、方針、手順において表明されていないならば、サービスを提供する組織がパーソンセンタードケアに基づいた取り組みを長く維持することはできないであろう。⁷⁾

また、キットウッドとブレディンは、パーソンセンタードケアについて言及する中で、個人の権利を尊重することの大切さを強調している。⁸⁾ 彼らによると、個人の権利を尊重することはその人を人として扱っていることになり、逆にその人の権利を無視したり、そんな権利がないかのようにほのめかしたりするのであれば、その人を物扱いしていることになる。

Ⅲ 日本におけるパーソンセンタードケア研究の動向

ここで、日本におけるパーソンセンタードケアの理念とそれに基づく認知症ケアマッピングの実践に関する研究の動向について概観する。

1、パーソンセンタードケアの日本への導入

2002年、長谷川和夫氏は「痴呆症ケアの新しい道」を著し、パーソンセンタードケアの理念を紹介している。それは「疾病あるいは症状を対象としたアプローチよりも、生活個体を対象にしたアプローチ」⁹⁾であり、「サービスを提供する側の選択ではなくて、利用者を中心にして選択するケアである。その人らしさ Personhood を尊重する。したがって痴呆症高齢者の自分史そして物語をケアの中心におく。痴呆の人の内的体験を聴くことにケアの原点をおくのである。」¹⁰⁾

心理学の立場では、2004年、石崎淳一氏が認知症高齢者に対する包括的心理的援助として「生理－心理－社会－霊性」(bio-psycho-socio-spiritual)モデルの可能性を提起する中で、パーソンセンタードケアの理念を用いて、「対象者のアイデンティティを支えることが援助の核心である」¹¹⁾としている。

村田康子氏は、作業療法士として、主に地域の高齢者に関わってきたが、2007年、『地域リハビリテーション』の中で、特集された「認知症の方を地域でどう支えるか」において、パーソンセンタードケアを紹介している。村田氏によると「本人中心のケアの最優先事項は認知症を持つ人の“パーソンフード”を支えることにある。“パーソンフード”を損なう“悪性の社会心理”を取り除き、人としてのニーズを満たす積極的なかわりを提供することが求められているのである。」¹²⁾

下山久之氏は、『月刊福祉』の各国の福祉事情の紹介のひとつとして、パーソンセンタードケアと認知症ケアマッピングが誕生した経緯、概要と特徴、及び今後の展望について検討している。¹³⁾

また高橋誠一氏は2006年、『ケアマネジメント学』第5号において「パーソンセンタードケアにおけるケアマネジメント」を発表している。その論文において高橋氏は、ケアマネジメントでは、アセスメントとケアプランにパーソンセンタードケア

の考えが活かされる必要があると主張し、認知症ケアを、人を中心とした新たなケア観に基づいて、じっさいのケアを行っていく必要性を説いている。¹⁴⁾

2、認知症ケアマッピング

パーソンセンタードケアに基づく認知症ケアマッピングとその実践についての紹介者のひとりとして、水野裕氏を挙げることができる。水野氏は2006年、日本で初めて認知症ケアマッピング法の認定トレーナーとなり、パーソンセンタードケアについて、創始者のキットウッド氏らの示している本来の意味とその実践活動の普及に努めている。

認知症ケアマッピングは、認知症ケアの実践をアセスメントしてケアチームのパーソンセンタードケアに関する気づきを促し、ケアの質の向上を図るツールである。認知症ケアマッピングは、パーソンセンタードケアの実践における、ケアの質の改善を目的とした観察・評価方法とそのフィードバックなどを含んだケアを改善するシステムから構築されている。¹⁵⁾ 通常、6時間以上連続して認知症の人を観察し、5分毎にどの行動カテゴリーに分類されるか、良い状態(well-being)から良くない状態(ill-being)までの、どの状態にあたるかをアセスメントする。これを表にしたものをマップという。

認知症ケアマッピングは、ブラッドフォード大学が認定した研修を受け、その使用が許可された人だけが実践することができ、一定期間、認知症の人を観察記録することによって行われる。¹⁶⁾

例えば、松尾絵美、渡邊啓子、川村未也子、田道智治は、ある高齢者専門病院での取り組みから、パーソンセンタードケアの実践の効果について検討している。¹⁷⁾

ここで松尾らは、「人」とは「独自のかけがえない個人」でありパーソンセンタードケアを実現するためには、患者一人ひとりにしっかりと向き合い、パーソンセンタードケアの知識を手掛かりにしつつ、ケアの試行錯誤を繰り返し続けていくことが重要であるとしている。

また、永田昌子は、介護付き有料老人ホームにおいて認知症マッピングケアのサマリーを活用することで、家族と職員との関係性の改善に役立つような気づきや、新たな課題を得ており、本人、

家族の両方の思いを共有できるように取り組むことが、信頼関係の維持につながるとしている。¹⁸⁾

さらに、鈴木みずえ等は、重度認知症棟における認知症ケアマッピングを用いたパーソンセンタードケアを実施することで、認知症ケアマッピングの効果について検討し、パーソンセンタードケアに取り組むことで、スタッフの認知症に対する意識の改善や認知症高齢者の生活の質に対して、良好な影響を及ぼすことを示唆する結果を示している。¹⁹⁾

IV コミュニケーションにおける留意点

1、当事者の視点についての理解

当事者はその人の視点から世界を見て行動している。共感をもって、その人の視点を理解する姿勢そのものに、その人が、よりよい状態になる力を引き出す可能性があること認識すべきである。個々人の視点に価値を置くことは、彼らの社会的自我を維持し、できる限り社会的な存在であることを成功させることに寄与する。²⁰⁾

また、ベンソン等は、『介護職のための実践！パーソンセンタードケア』において、認知症ケアのためのコミュニケーションに関する示唆に富んだ考察を行っている。例えば、以下のような点を挙げることができる。²¹⁾

① 個別的な人生の歩み

利用者一人一人の人生を意識する。思い出を引き出すもの（写真、新聞、雑誌など）があれば、さほど記憶に頼らずに会話をすることができる。

② 隠れた意味

相手が話した言葉を聞くだけでなく、その奥にある感情や意味を汲み取る。相手のボディラングージや人生が、隠れた意味の手掛かりをくれることもある。

③ 一緒に「いる」

障害が重い人とのコミュニケーションは、ただ単に相手のためにそこにいて、時間をとって分かち合うことが大切である。

表1 パーソンセンタードケアにおける具体的な方法に関するリスト

<ul style="list-style-type: none"> ・認めること 介護者は、認知症の人を率直で偏見のない態度でそれぞれの独自性を認める。 ・交渉 介護者は、認知症の人のすることはわかっていると思わず、あえて尋ね、聞く。 ・共同 介護者は押しつけや強制などの力を意識して避けること。 ・遊び 介護者は自由に子どものように創造的になることができる。 ・ティマレーション 認知症の人は直接感覚によって喜びを得る。介護者は感覚を通じてくつろぎを得る。 ・お祝い 負担や仕事を超えて、介護者は素直に喜び、人生の恵みに感謝する。 ・リラクセーション 介護者はしばらく手を休め、ゆとりをもち、身体と心に休息を与える。 ・バリデーション 介護者は、他者と共感するために自分自身の準拠枠を超える。 ・抱えること 認知症の人の経験を落ち着いて確実に敏感に受けとめつつ、介護者はそこにとどまる。 ・ファシリテーション 認知症の人が行う身振りに対応すべく、意味の創造を共有する。 ・創造的行為 認知症の人による創造的行為をあるがままに受け取り、認める。 ・贈与 介護者は認知症の人からのあらゆる親切、手助けを十分に謙虚な気持ちで受け止める。

出典：Tom Kitwood, *Dementia Reconsidered the person first*, Open University Press 1997（高橋誠一訳）『認知症のパーソンセンタードケア』筒井書房 2005年
P. 208-210 から作成。

トム・キットウッドは、極めて暫定的なもので、完全に仕上げるためにはさらなる研究が必要である²³⁾と述べた上で、表1に示すような認知症の人を対象としたパーソンセンタードケアにおける介護者の12の前向きな相互行為（具体的な方法）をリストアップしている。²³⁾

ここで強調しておきたいことは、これらの実行にあたっての介護者の資質に関する点である。トム・キットウッドによると「良いケアを実行するには介護者の人間的な成長が必要なことを十分示している。すなわち、開放的で、柔軟で、創造的で、思いやりがあり、敏感で、心に落ち着きがある人である」。²⁴⁾認知症高齢者とのコミュニケーションについては、テクニカルな点を学ぶことだけでなく、人格的な成長にも励む必要がある。

2、コミュニケーションと「問題行動」

キットウッドとブレディンは、「おもらし」について次のように述べている。²⁵⁾

おもらしをしてしまうこと、いつそのようになるかすらわからないことで、その人がどのような気持ちになっているか理解することが大切である。起こったことに対して淡々と事務的に対応し、きれいに掃除するのがよい。やさしく受け入れることは、おもらしを助長することにはならない。こうすることはむしろ、相手の感情をわかち合い、もっと自尊心をもてるようにしていることになる。一番厄介な問題は、相手がわざと排泄物を床や家具に塗りつけたりするようなどきである。ときにこれは、ほとんど希望をなくしてしまった人が注意を引くための絶望的な試みとして理解される。

介護者はよく、ひどく混乱した人の行動を矯正して問題が頻繁におこらないようにしようとする。この考え方は一般に見受けられるが、何よりも批判したり、非難したりしないで、問題ではなくその人に目を向けて、簡単に望みを満たせる方法を探ることが大切である。問題に焦点を当てるのではなく、その人に焦点をあてた（パーソンセンタードな）ものなら、介護する人もされる人も、今よりずっと幸せになれるであろう。²⁶⁾

認知症ケアを行う上で、個人の健康についての捉え方も重要な要素となる。高齢であるから、健

康上問題があっても、個別的に対処しないで、治る見込みのない状態として認識してしまうことが一般的にある。キットウッドはこの点に関して次のように述べている。「認知症の人が身体的によい状態を保てるように、しっかりとした注意を向けることが必要である。その人を中心としたケア（パーソンセンタードケア）に真剣に取り組むとき、この問題を無視することは危険だろう。根本的問題が身体的健康に関連するにもかかわらず、心理的原因があるかのように取り扱い、心理的な解決だけに注意を向けることは避けなければならない罫である」。²⁷⁾

VII まとめ

特に日本社会での状況からすると、介護の社会化が進んでいる時代においては、パーソンセンタードケアの理念が、認知症ケアの中心的なパラダイムとなることが期待される。

認知症高齢者の声に耳を傾けること、その人たちが書いたものを読むこと、言葉と行動にきめ細やかに心を傾けながら、寄り添うことによって、その当事者の視点を理解することに近づくことが出来る。

人の価値を認めること、尊重、信頼はパーソンセンタードケアの真髄である。当事者の価値を認める介護提供者の育成のためには、組織管理者、家族といったケア提供者を取り巻く人々が、ケア提供者の価値をさらに認めることが肝要である。

今後の研究課題として、次の2点を挙げておく。

(1) 理論の背景にある文化的な要素の理解

パーソンセンタードケアを実践するに当たって、その理論的背景をさらに理解するための研究が必要である。

トム・キットウッドの経歴を見ると、かつてキリスト教牧師であったことは、特筆に値する。一人ひとりの違いについて理解し、尊厳を保持し、ケアに当たるといふ彼の理論的土台としては、聖書に起源を持つキリスト教的価値観を挙げることが出来る。こうした文化的な要素について理解した上で、実証的・理論的研究の深化に努めるべきである。

(2) 介護者が実践できる職場環境

パーソンセンタードケアを行うに当たっては、サービスを提供する組織（システム）のしくみを再検討するための研究が必要である。

パーソンセンタードケアを実践する場合の前提として、ケアを行う人が、対象者のことについてよく知っていることが必要である。パーソンセンタードケアを導入するならば、従来よりケアを受ける対象者一人ひとりに対しての労力は、増大する可能性がある。一人ひとりの違いをしっかりと見据えて、その違いに合ったケアを計画し、それを実践するためには、介護者の個人的努力だけではなく、サービスを提供する組織（システム）の構造自体を捉え直すことが肝要である。

〔謝辞〕 介護実習巡回時に多くの施設の職員の方々からご教示いただきました。特にお名前を挙げませんが、心より感謝申し上げます。

(注)

- 1) 水野裕「Quality of Care をどう考えるか —Dementia Care Mapping(DCM) をめぐって—」『老年精神医学雑誌』第15巻 第12号 2004年 P.1384。
- 2) Tom Kitwood, *Dementia Reconsidered: the person first*, Open University Press 1997 (高橋誠一訳)『認知症のパーソンセンタードケア』筒井書房 2005年 P.20を参照。
- 3) Tom Kitwood, *The Dialectics of Dementia, Aging and society* 10, 1990, P177.
- 4) D.Brooker, *Person-centred Dementia Care*, Jessica Kingsley Publisher 2007 (村田康子他訳)『VIPSですすめるパーソン・センタード・ケア』クリエイツかもがわ 2010年 P.17。
- 5) D.Brooker 前掲書 P.18。
- 6) D.Brooker 前掲書 P.19。
- 7) D.Brooker 前掲書 P.51。
- 8) Tom Kitwood and Kathleen Bredin, *Person to Person: A Guide to the Care of Those with Failing Mental Powers*, Gale Centre Publications, 1992 (高橋誠一監訳・寺田真理子訳)『認知症の介護のために知っておきたい大切なこと』筒井書房 2005年 P.131-132を参照。
- 9) 長谷川和夫「痴呆ケアの新しい道」『日本痴呆ケア学会誌』Vol.1 No.1, 2002年 P.39。
- 10) 長谷川和夫 前掲書 P.39-40。
- 11) 石崎淳一「痴呆性高齢者に対する包括的心理的援

- 助』『心理臨床学研究』第22巻 第5号 2004年 P.467。
- 12) 村田康子「本人中心の考え方をケアにどう生かすか — パーソン・センタード・ケア」『地域リハビリテーション』Vol.2 2007年12月号 P.1014。
- 13) 下山久之「イギリスにおける認知症高齢者介護②」『月刊福祉』2008年11月号 P.94-97、下山久之「イギリスにおける認知症高齢者介護③」『月刊福祉』2008年12月号 P.98-101。
- 14) 高橋誠一「パーソンセンタードケアにおけるケアマネジメント」『ケアマネジメント学』第5号 2006年 P.5。
- 15) 鈴木みずえ編『認知症ケアマッピングを用いたパーソンセンタード・ケア実践報告集』クオリティケア 2009年 P.1。
- 16) 鈴木みずえ編 前掲書 P.1-16、及びP.106-109に掲載されている「資料6」を参照。
- 17) 松尾絵美・渡邊啓子・川村未也子・田道智治「老人性認知症疾患治療病棟におけるDCM法を用いたケアの質向上の取り組み」鈴木みずえ編 前掲書 P.69-76。
- 18) 永田昌子「認知症ケアマッピングを用いたご家族・職員コミュニケーションの工夫 — 思いの共有 —」村田康子・鈴木みずえ・内田達二編『認知症ケアマッピングを用いたパーソンセンタード・ケア実践報告集第2集』クオリティケア 2010年 P.57-61。
- 19) 鈴木みずえ・水野裕・グライナー智恵子・深堀敦子・磯和勅子・坂本涼子・宮園美沙子・出口克己・金森雅夫・Dawn Brooker「重度認知症棟におけるケアマッピングを用いたパーソン・センタード・ケアに関する介入の効果」『老年精神医学雑誌』20号 2009年 P.668-680。
- 20) B.McCarthy Hearing the Person with Dementia Jessica Kingsley Publisher 2011 P.14。
- 21) Sue Benson, The care assistant's guide to working with dementia, Hawker Publications 2002 (高橋誠一監訳・寺田真理子訳)『介護職のための実践! パーソンセンタードケア』筒井書房 2007年 P.32-59を参照。
- 22) Tom Kitwood, Dementia Reconsiderd the person first, Open University Press 1997 (高橋誠一訳)『認知症のパーソンセンタードケア』筒井書房 2005年 P.158。
- 23) Tom Kitwood 前掲書 P.158-163、P.208-210を参照。
- 24) Tom Kitwood 前掲書 P.210。
- 25) Tom Kitwood and Kathleen Bredin, Person to Person A Guide to the Care of Those with Failing Mental Powers, Gale Centre Publications, 1992 (高橋誠一監訳・寺田真理子訳)『認知症の介護のために知っておきたい大切なこと』筒井書房 2005年 P.74-75。
- 26) Tom Kitwood and Kathleen Bredin 前掲書 P.63。
- 27) Tom Kitwood 前掲書 P.210。
- 【引用・参考文献】
- (1) Tom Kitwood, Dementia Reconsiderd the person first, Open University Press, 1997 (高橋誠一訳)『認知症のパーソンセンタードケア』筒井書房 2005年
- (2) — , The Dialectics of Dementia, Aging and society 10, 1990, 177-196
- (3) Tom Kitwood and Kathleen Bredin, Person to Person A Guide to the Care of Those with Failing Mental Powers, Gale Centre Publications, 1992 (高橋誠一監訳・寺田真理子訳)『認知症の介護のために知っておきたい大切なこと』筒井書房 2005年
- (4) D.Brooker, Person-centred Dementia Care, Jessica Kingsley Publisher 2007 (村田康子他訳)『VIPS ですすめるパーソン・センタード・ケア』クリエイツかもがわ 2010年
- (5) B.McCarthy, Hearing the Person with Dementia, Jessica Kingsley Publisher, 2011
- (6) 鈴木みずえ編『認知症ケアマッピングを用いたパーソンセンタード・ケア実践報告集』クオリティケア 2009年
- (7) 村田康子・鈴木みずえ・内田達二編『認知症ケアマッピングを用いたパーソンセンタード・ケア実践報告集第2集』クオリティケア 2010年
- (8) Sue Benson, Person-Centred Care, Hawker Publications 2000 (稲谷ふみ枝・石崎淳一監訳)『パーソンセンタード・ケア 改訂版』クリエイツかもがわ 2007年
- (9) Sue Benson, The care assistant's guide to working with dementia, Hawker Publications 2002 (高橋誠一監訳・寺田真理子訳)『介護職のための実践! パーソンセンタードケア』筒井書房 2007年
- (10) 水野裕「Quality of Care をどう考えるか — Dementia Care Mapping(DCM) をめぐって —」『老年精神医学雑誌』第15巻 第12号 2004年
- (11) 村田康子「本人中心の考え方をケアにどう生かすか — パーソン・センタード・ケア」『地域リハビリテーション』Vol.2 2007年12月号
- (11) 長谷川和夫「痴呆ケアの新しい道」『日本痴呆ケア学会誌』Vol.1 No.1, 2002年
- (12) 石崎淳一「痴呆性高齢者に対する包括的心理的援助」『心理臨床学研究』第22巻 第5号, 2004年
- (13) 一番ヶ瀬康子・黒澤貞夫編『介護福祉士思想の探究』ミネルヴァ書房 2006年
- (14) 小澤勲「認知症を生きる人たち」上野千鶴子他編『ケア その思想と実践2 ケアすること』岩波書店 2008年

- (15) 小倉千恵子他「教育現場における認知症ケアについて ― パーソンセンタードケアによる認知症ケア：センター方式の活用状況 ―」『第15回日本介護福祉学会大会プログラム・要旨集』2007年 P.120
- (16) 下山久之「イギリスにおける認知症高齢者介護①」『月刊福祉』2008年10月号
- (17) ― 「イギリスにおける認知症高齢者介護②」『月刊福祉』2008年11月号
- (18) ― 「イギリスにおける認知症高齢者介護③」『月刊福祉』2008年12月号
- (19) 鈴木みずえ・水野裕・グライナー智恵子・深堀敦子・磯和勅子・坂本涼子・宮園美沙子・出口克己・金森雅夫・Dawn Brooker「重度認知症棟におけるケアマッピングを用いたパーソン・センタード・ケアに関する介入の効果」『老年精神医学雑誌』20号 2009年 P.668-680
- (20) 高橋誠一「パーソンセンタードケアにおけるケアマネジメント」『ケアマネジメント学』第5号 2006年 P.5-13
- (21) R.Adamus, *Social Work and Empowerment : Third Edition*, Palgrave Macmillan, 2003 (杉本敏夫・斎藤千鶴監訳)『ソーシャルワークとエンパワメント』ふくろう出版 2007年
- (22) Clive Baldwin and Andrea Capstick(ed), Tom Kitwood on *Dementia*, Open University Press, 2007

(2011. 11. 29 受稿, 2012. 12. 8 受理)